

安部公房『第四間氷期』論

——SF・仮説・グロテスク——

柚 谷 英 紀

『第四間氷期』（講談社、一九五九・七）は、日本の長篇SF小説の嚆矢とされる⁽¹⁾。科学と未来世界をテーマにしているという内容はもちろん、『世界』に連載された当初第二回まで「空想科学小説」と冠されていたことを考えると、安部公房が特にSFというジャンルに拘ったテキストであることが了解される⁽²⁾。安部は、人間がロボットのよう改造されるというサイボーグをテーマにした「R62号の発明」（『文学界』一九五三・三）、未来世界を描いた「鉛の卵」（『群像』一九五七・一一）などを既に発表していたので、『第四間氷期』は日本のSFのパイオニアとしての自負をもって執筆された作品、と言えるかもしれない。また、安部は一九五七年あたりからロバート・シエクリーなどのアメリカSF小説に言及することが多くなり、また、当時の科学的現象についての発言も多く見られ、正面から科学やSFに向きあおうとしていたように見える。本稿では、一九五八年前後の安部の科学観を巡るいくつかのテキスト、および安部が受容した海外SF、「科学」に関する文献を参照し、さらにテキストから暗示される当時の日本の「生殖」に関する状況についても触れつつ、『第四間氷期』における安部のSFの方法論と実践との相互作用について考察す

る。

一、 SFとグロテスク／ 仮説としての怪物

花田清輝は、日本における早い段階でのSFについての評論である「科学小説」において、「かつて『フランケンシュタイン』の作者であるマリイ・シェリーがおのれの作品に、「現代のプロメテウス」という傍題をつけたのにならって、わたしは、ここに、今日の火をぬすんだものの物語があるといってもいい」として、『第四間水期』の主題が「科学」そのものであることを指摘した⁽³⁾。続けて勝見を「日常的なもののなかにどっぴりとひたりきっているニセモノのフランケンシュタイン」、後半の山本博士を「ホンモノのフランケンシュタイン」と捉えて、「ニセモノが、ホンモノによって断罪されていく過程」が描かれているとした。花田が読み取った科学に関する「ニセモノ」と「ホンモノ」との対立軸は物語内容の枠組みを反映したものであるが、それをフランケンシュタインの物語に象徴させたことは興味深い。

花田に応えるように、後の安部は、エッセイ「SFの流行について」（『朝日ジャーナル』一九六二・九）においてフランケンシュタインに言及している⁽⁴⁾。安部はフランケンシュタイン博士が造り出した怪物の内面を捉えて、「この恐るべき怪物も、じつは人間の愛と孤独をさぐるための、仮説にほかならな」と指摘して、SFを「仮説の文学」であるとする立場を提示し、「仮説の設定」から日常性に衝撃を与えることにこそSFの精髓があると主張した。

SFにおける「仮説」の例として「怪物」が挙げられたわけだが、花田と安部がともにSFについて論じる際にフランケンシュタインの物語を挙げたのは偶然ではないだろう。「怪物」は外見がグロテスクで内面に「人間の愛と孤独」が想定でき、内部と外部との差異を表現するのに適した素材である。安部文芸において、「R62号の発明」や人

魚が主人公の分身を食べて続けていたという「人魚伝」(『文学界』一九六二・六)といったSF的な作品では特にグロテスクな表象が目立っている。グロテスクとSFとの関係について、座談会「科学から空想へ」(『世界』一九五八・二)で安部は次のように発言している。

無限の可能性を求める非合理の主体として人間を考えるなら、たとえば恐怖という概念もなくなるのではなく、ますます大きな未知に対決しなければならないことになる。だからこれから可能性があるのは、たとえばポーなどのグロテスクであるとか、最近ではシェクレーの空想科学小説など、そういう新しい恐怖の発見や展開に可能性がある。(5)

科学をテーマにした座談会において、安部はポーやSFの「グロテスク」や「新しい恐怖の発見や展開」にこそ文芸の「可能性」を見ているのである。では、その「可能性」とはどういうものなのだろうか。

ここで名前が挙げられているアメリカのSF作家ロバート・シエクリイについて安部は、同じ座談会でもう一度言及しているが、「偏見」を育成しよう(『世界』一九五七・四)というエッセイで、「体形」という小説をとりあげているので参照する。不定形生物であるグロム人は長い因襲のため「先祖伝来の職業を継承し、その職業に許容された一定の体形だけを取らなければならない」のだが、侵略のためにやってきた地球が「彼等の好きな体形を取れる理想郷であることを知り」「地球上に自由の天地を見出して住みついてしまう」という物語である⁽⁶⁾。安部は、「偏見」を「情緒のステレオタイプが、新しい認識に対しておこすアレルギー反応」だとした上で、「偏見」の「実体」をグロム人の不定形の体形に見ている。不定形なのに「一定の体形だけ取らなければならない」のは、「政治」が「偏見の組織化を考え」て、「政治が偏見に形体を与える」からである。つまり、自由なはずの「偏見」は政治によって組織化されている。しかし、「偏見」を成長させることで「対立物を自覚する」ことができるという。したがって、「成長し

きつた偏見は自壊して正見に転化するにちがいない」として、「偏見」を「育成する」ことが、「対立物との衝突からエネルギーをつくり出す」「革命的なやり方」だと主張する。「体形」の結末部で、頑なに任務を遂行しようとしていたグロム人の主人公ビッドが、地球人に包囲されて「体形の自由とは一体どういうことなのだ」と考え、「一羽の大きな白い鳥」になって自由に飛び立つ。このあざやかな転換が、安部のいう「可能性」のある表現なのである。

先の「グロテスク」な「仮説」とは、ここである「偏見」を「育成する」ことをより本質化した表現ではないだろうか。少くとも、安部は「怪物」のような「偏見」という「仮説」に政治的なものを打ち破るSFの可能性を見ており、その実践として『第四間氷期』ほかのSF作品は執筆されていると考えられる。

二、シミュラクルとしての予言機械 — 仮説の戦略

ソ連が「モスクワ1号」という予言機械を開発したが、物語が始まる時点の三年前である。日本でも対抗して、最先端の科学研究所である中央計算技術研究所に日本製の予言機械の開発のための分室が設置され、その室長にプログラム専門の研究者である勝見博士（私）が、分室長に任命される。勝見と助手の頼木ら開発チームの努力により、「KEGI-1」というコンピュータの開発に成功するが、実用の前段階で上からの圧力がかかり、予言機械の試運転さえできないところから物語は始まる。苦肉の策で、一個人の未来を予言するという実験を開始し、その人物の尾行をしていた「私」と頼木は、殺人事件に巻き込まれる。……というような前半のミステリータッチの物語展開から、後半、急転直下に胎児ブローカー組織の暗躍、両棲哺乳類の研究所、水棲人間の牧場、殺し屋の尾行、そして主人公と他の登場人物達との未来に関する哲学的な議論といったSF的な要素と独自の世界観を開示するスピーディーな展開で読者を悪夢のような未来へと連れていく。以後、前半と後半に分けて「仮説」を取り出し、その戦略性や構

造・思想性について考察する。

予言機械こそ最初に登場する「グロテスク」な「仮説」であるといえよう。工業的再生産の頂点ともいえるテクノロジーを持つ予言機械は物語が進むにつれ、まるで生物であるかのように見えるようになる。たとえば、「機械が勝手に動きだすような気がしたり」〔6〕、死体から情報を得るために、予言機械が死体の人格方程式を読みとり会話する場面〔14〕では、「機械なのだと思いつながら、薄気味悪」く「機械の単純な正確さとは、違いすぎる」ものを勝見に感じさせる。このような擬人化された機械、そこに「グロテスク」の具体があると考えてよい。次は脅迫電話をかけてきた「第二次予言値」に「誰でもいいから、かわつてくれ！」と勝見が叫ぶ場面。

「かわりますか？」と彼が振向いて声でたずね、すぐにはなやいだ和田の笑声がそれに応じ……

「だって、先生が、ご自分でおはなしになっているんじゃないやありませんか……」

まったくそのとおりだ。そこにすでに私がいる以上、さらに私が顔を出すなんて、どうみてもこっけいな話だ。しかし、この私の立場は、いったいどういうことになるのだろうか？〔30〕

「予言機械は一つの複製技術である」と指摘したクリストファー・ボルトンは、「第二次予言値」という「複製品が自分の原型までも抹殺して、完璧なシミュラクル」になる過程を「アイデンティティーの危機」として捉えている⁽⁷⁾。ここでは、勝見には冷たい和田が予言機の第二次予言値には「はなやいだ」「笑顔」で返答するシークエンスは勝見にとって効果的なものとなっている。和田は、勝見の子供についても親身になって世話をしているが、勝見には冷淡である。和田の中では、「第二次予言値」こそが自身の勝見であるかのように見える。後の安部は、「仮面」が意識を持って動き出す『他人の顔』（一九六四・九、講談社）や贗箱男と本物の箱男が錯綜する『箱男』（一九七三・三、

新潮社)においてアイデンティティが揺さぶられる不安を描いたが、同様な不安に取り憑かれたように書き続けたSF作家にフィリップ・K・ディックがいる。ディックの最初期の短編小説「外来者」をこの時期の安部が読んでいるので参考してみた。

岡本太郎との対談「宇宙・人間・芸術」で、安部は作品名や作家名は挙げていないものの、「外来者」のプロットを説明している⁽⁸⁾。安部が読んだのは、『宇宙恐怖物語 宇宙科学小説シリーズ1』(グルフ・コンクリン編、下島連訳、東京元々社、一九五七・一〇)であろう⁽⁹⁾。地球と交戦中の星から地球にやってきた、自分が地球人オルハムだと信じているロボット爆弾が、ある暗号を発することによって爆発するという短編小説であるが、焦点化されているロボットは自らをオルハムだと信じて疑わないし、読者にもそれはわからない。ちょうど勝見博士が部下達から弾劾されるように、友人や妻が彼を追いつめる。彼は「僕は僕だということを証明する方法がぜんぜんない」ことに茫然とするが、知力を尽くして危機を脱する。最後にオルハムの死体を発見してしまったロボットは、「しかし、もしそれがオルハムなら、僕はロボットに……」という暗号の言葉を発してその瞬間、大爆発が起きる……。ディック作品でも最も早く邦訳されたと思われる作品である。外見と記憶まで奪ってしまうシミュラクルが、人間の自分を証明する方法をも奪うというディックらしいテーマが描かれており、安部の『使者』(一九五八・一〇『別冊文芸春秋』)や『人間そっくり』(一九六六・九―一、『SFマガジン』)といったSFはディックの影響を受けているといえよう。

安部は対談において、「外来者」について「実に必然的だけど、グロテスクだ」とし、「ポーあたりの一種の伝統だと思う」として、「こういう合理性と、極端なフィクションナルなものとの結合」を高く評価している。自分が自分であるという証明はできないから、自分がロボットであつても不思議はないという論理をもとに物語が組み立てられている点を「必然的」かつ「グロテスク」と評しているのであろう。しかし、より重要なのは、焦点化されていた人物

が実はオルハムではなく、ロボットであつたという点である⁽¹⁰⁾。話す屍体が「本当の人間」ではなく「予言機に記憶された」「人格方程式」として消去されるように、勝見は予言機械の「第二次予言値」によってその存在価値を奪われて殺される。物語の結末部で勝見がは「一番いけないのは、自分自身が信じられなくなつてしまつたことだ。自分がぼろ肩にふさわしいような、無価値なものに見えてきたことだ」と考えてしまう。しかも焦点化されているから、読者もまた同じような世界に連れて行かれている。そこに戦略的な「新しい恐怖」があるのではないか。次に、より具体的に時代と「グロテスク」な表象との関連について光をあてたい。

三、リプロダクションと政治　／　仮説の構造

「プログラムカードNo.2」に至つて、勝見と頼木は山本研究所で水棲哺乳類の製造工場を見学する。その湿度感のある生々しい様子を見せられた勝見が「かなりぞつとしてしまいますね」というと、山本博士は「一般に隔絶した未来は、グロテスクな感じをあたえるものらしいです。(略) 人間生活とのかかわりが理解できないものは、恐ろしいということです。無意味で、しかも自分より強力なものは……」と応える〔24〕。勝見が見学している水棲哺乳類の水槽は我々の日常とのつながりのない「無意味で、しかも自分より強力なもの」として現れるから「グロテスク」だというのだが、その言葉通りには受け取れない。むしろ、「人間生活とのかかわり」があるからこそ「グロテスク」となるのではないか。たしかに、水棲哺乳類の開発は生理的な嫌悪感が伴うものであるが、勝見が怖れているのはそこではないだろう。

暗い水の中からじつとこちらを見つめている、生れるはずのなかった私の子供……(略) 枕の上にあぐらをかいて、妻との

つまらぬ傷つけ合いに、心理的満足感を味わいながら生んでしまった子供……その夜の怠惰な自己欺瞞と、愚鈍なうぬぼれ自体が、復讐となってあらわれたのだ……これで傷つけ合いは、まったく一方的になつてしまふことだろう。妻はそのむりやり生かされたわが子の化物で、さんさん私を鞭打とうとし、防ごうとすればするほど、私は傷つき、しかも逃れようとするればその向うには、じつと見開かれた水の中の眼が待っている……〔22〕

自分の子どもが水棲人間として「じつとこちらを見つめている」というグロテスクなイメージは、水棲哺乳類の可能性を知った勝見にとって大きな問題となっていた。山本研究所から帰還した勝見は、「私の子供が鰓をもった水棲人間として誕生し、やがて成長したとき私たち両親のことをいったいどんなふうにかえるかと、それを思ったただけもぞつとしてしまふ」〔28〕と考え、自分の子どもである胎児を殺すことを計画し、それが勝見の処刑につながることになる。

ところで、山本研究所での水棲哺乳類を産出する場面では、子宮、胎盤、産道、胎児……という出産にまつわる生々しい隠喩を字義通り展開させたような、生殖を近代的な工場で行うという悪夢のような表現が見られた。それは、まさしく生物学的再生産と工業的再生産が融合したものとして現れる。人間を含む哺乳類の生殖がはたかも作物を栽培・収穫するかのように取り扱われ、勝見貞子が受けさせられた墮胎手術は、「手術はすぐにすんじやつたわ。まるでオートメーションよ。考える暇なんかありませんじゃないの」という印象が語られる。工業生産としての生殖、とでもいふべき奇怪なイメージは、「墮胎天国ニッポン」と言われた一九五〇～六〇年代の日本の生殖の事情を反映していると考えられる。「最近の厚生省の発表でも、中絶胎児の数は出生児とほぼ同数で、年に二百万以上にもなっているらしい」という頼木の言葉にもそれが表れている。何より、和田勝子の「それでは、先生は、胎児殺しを罪だとお考えにならないのですか?」〔22〕という問いを巡る勝見との対話には、墮胎についての問題提起が明らか

である。和田は「私、先生を裁判しようと思っっているんです」と宣言するが、何気なく繰り返される勝見の「そんなこと、考えていたら、きりが無い」という答えが勝見の死刑判決の決め手となったと考えられるから、未来についてのイメージが氾濫するテキストにおいて、堕胎についての問題は未来を考察する直接的な課題であったということになる。ここでは、抽象的議論を避けてテキストにおける「未来」観を考察するために、勝見夫婦の中絶に関するエピソードから垣間見える戦後日本の人口政策について考えてみたい。

まず、一九五八年当時の日本におけるバース・コントロールという思想・政治学について、ごく簡単に整理しておく⁽¹⁾。敗戦後、占領下の日本は、旧植民地からの市民や兵士の帰還、戦後ベビーブームにより急激な人口増加に直面していた。その際、日本の経済復興のために大きな効果を上げたのが、一九四八年に制定された優生保護法である。人工妊娠中絶（以下、中絶）を合法化するこの法律は、翌一九四九年に改正され、「身体的又は経済的理由により母体の健康を著しく害するおそれのある」場合に中絶を許可するという条文を加えることになり、さらに一九五二年には、指定された医師の判断のみで中絶が可能となった⁽²⁾。「優生保護統計」によると、一九五三年から一九六一年まで中絶の件数が年間一〇〇万件を超え、報告されないものを含めると、頼木の言う「年二〇〇万以上」というのは特に誇張されたものともいえない数字である⁽³⁾。ちなみに『第四間氷期』が連載されていた一九五八年が報告された中絶件数は一、一二八、二二一件でピークとなっている。

また、優生保護法の性質の一面は、たとえば『朝日新聞』に掲載された慶応義塾大学教授の林謙の「悪いタネを残さないためにはどうしても堕胎刑法を撤去しなければならぬ」といった言説に表れている⁽⁴⁾。林謙は、安部がこの時期特に執着したパブロフの『条件反射』を日本に紹介した人物でもあるが⁽⁵⁾、かといって安部が林に共鳴したとは思えない。林の「人体の中に入っているものに対する態度は、生まれてしまった人間に対する態度と混同してはならな

い」という言葉は、勝見の「まだ意識のないものを、人間と同格にあつかうわけにはいかないさ」という言葉を想起させる。勝見の言葉は和田によって「でも、妊娠九ヶ月でまだお腹にいる子供は殺してもかまわないけど、早産で先に生れた子供は殺しちゃいけないなんて、ずいぶん便宜的だわ」と論破されることから、むしろ林のような優生学思想を否定しているのは明らかである。

さて、一九五二年には受胎調節実施指導員の制度が設けられるなどして、避妊の知識を広める運動が官民を通じて拡がり始めていた。荻野美穂は、一九五四年には、「家族計画」は個々の家族の幸福のみならず、企業的发展、さらに平和国家の実現へと至る基本理念、あるいは思想であり、受胎調節はこの理念を現実のものにするために不可欠な手段としての位置づけを与えられた」と指摘している⁽¹⁶⁾。一九五八年五月に調査された「産児調整に関する世論調査」によると、堕胎経験者は二六・五パーセントだが、無回答の大部分が堕胎経験者だとすると、四五パーセントを超えることになる。また、「避妊経験者における堕胎の経験」を調査すると、全避妊経験者中の四分の一は、避妊の失敗による堕胎を行っていることが判る⁽¹⁷⁾。「いちど子宮外妊娠を経験してから妊娠には極度に神経質になっていった勝見貞子のケースは、この中に含まれるのであろう。

SF評論家の小谷真理は、SFと出産との関係をリプロダクションという言葉を用いることによる工業的再生産と現代の出産とのアナロジーについて考察している⁽¹⁸⁾。

もともとリプロダクション reproduction とは、爬虫類とりわけとかげなどが尾など身体部分を切断されてもじきに回復できる機能を意味しており、そこから転じて生物学的再生産、すなわち生殖というニュアンスが誕生した。さらに、産業革命以降十九世紀になると写真術の発展もあって原型をそっくりコピーできる技術体系としての意味が強まり、リプロダクションは工業的再生産を指す言葉としても使われ始める。

二つのグロテスクな怪物、すなわち生物研究所の水棲哺乳類の生殖システムと予言機械とは、後者がシミュレーターを製作する機能を持つことを思うと、まさしくともにリプロダクションのシステムということになる。それは、山本研究所と予言機械との「仮説」が、ともにリプロダクションのシステムを構造としてもつということを意味する。小谷によれば、女性が主体となつて行われていた生物学的再生産に、テクノロジが介入することで「生殖技術を行使する大半が男性、対象とされるのが女性という役割分担がエスカレート」したという。たしかに、荻野美穂は、「避妊（および初期に堕胎）を、女が自分で自分の人生を管理し、決定権をもつための不可欠の条件として」いたマーガレット・サンガー（アメリカのバース・コントロール運動の指導者）が、「運動への支持を獲得するためにすすんで医学や優生学に接近し」た結果、「科学専門家の圧倒的多数は男であつたから」「生殖を管理する主体がはつきりと女から男に移つた」という状況を報告している¹⁹⁾。

「じゃあ、堕ろせて言うのね。」「誰もそんなことは言つてやしないよ。君の判断にまかせるつて言っているんじゃないか。」「あなたの意見を聞いているのよ。」「べつにないね、どうでもいい……」〔23〕

勝見貞子は堕胎について夫に相談するが、勝見は聞く耳を持たない。それで電話で呼び出されたので「とにかく、先生に相談してみるつもり」で病院へ行つた後、胎児を強奪されたのであつた。貞子は、中絶の決定権を夫、医者へと譲渡していき、最終的にそれは「政府にまさる権限をもっている」という海底開発協会という権力に回収されてしまったのである。勝見の子どもが水棲人間へと生まれ変わるまでに母親から父親へ、父親から医師へ、医師から国家へと責任が転移していくバースコントロールの戯画ともいえる構図が描かれているのである。同様にもう一つのリプロダクションである予言機械もまた、産みの親である勝見から奪われ、いつの間にか海底開発協会という大きな権力

の手中に落ちていることを考えると、リプロダクションは権力の構造の一部として機能しているといえる。

なぜ、勝見は自分の子どもを殺そうとするのか。一つには、「息子を片輪の奴隷にされて」という言葉からも判るように、彼の優生思想があるともいえる。しかしむしろ、先に触れた自分の子ども「見開かれた水の中の眼」というグロテスクなイメージこそがその動機であろう。ここでは、勝見と山本博士との二人のフランケンシュタインによって造られた「怪物」の構造を捉える必要がある。このグロテスクなイメージは、生物学的再生産と工業的再生産とを結びつけるリプロダクションという政治を投影したものであり、「怠惰な自己欺瞞と、愚鈍なうぬぼれに対する」妻の、あるいは女性の男性に対する「復讐」を構造化した「仮説」なのである。男性としての責任を自覚した勝見は、「復讐」から逃れるためにわが子を殺すことを考えたのだった。グロテスクな「断絶した未来」とは、実は政治的にグロテスクな奥行きをもつ現在の投影なのである。

四、人間は改造されるか / 仮説の思想性

山本研究所における生物学の説明について、磯田光一、鳥羽耕史によつて、ソ連のミチューリン生物学の提唱者ルイセンコの遺伝学に依拠していることが指摘されている⁽²⁰⁾。「サイバネティックスというアメリカを、ミチューリン生物学というソヴィエトを、そして何よりその狭間にあつた日本を照らしだすこと」を読みとつた鳥羽の指摘は、時代の国際情勢・イデオロギーを読み込むという点で興味深い。ここでは、安部が一九五八年の二つのエッセイで直接引用しているジャン・ロスタン『人間は改造されるか』（丹羽小弥太訳、講談社 一九五七・一二）を参照することから考察したい。ロスタンは、フランスの生物学者でもあり、科学や文明に関する評論家でもある。なお、一九五〇年代にはロスタンの翻訳が多く出版されていて、その内『生物学の潮流』（丹羽小弥太訳、白水社、一九五三・五）には、ミ

チューリン生物学や「実験的突然変異」などが詳しく紹介されており、安部が参照した可能性は高いと思われる⁽²⁾。

『人間は改造されるか』ではタイトル通り、人間の身体を生物学的に改造することに関する議論が展開されている。安部はエッセイ「1957・アルファの逆説」(『みづゑ』一九五八・一)の冒頭で「人造人間の悪魔や機械主義の非人間性について愚痴ばかりこぼすのは、御本人の想像力の欠陥と自由への恐怖を物語る以外の何物でもない」というレーモン・クノーの言葉を『人間は改造されるか』から再引用している。それは『人間は改造されるか』の「第二章 人間と科学」で引用されたものであるが、人工頭脳と人間の頭脳に変革を与えるという、科学を発展させる二つの方向を示し、その倫理性について考察した際の言葉である。ロスタンはこのように人間の改造を肯定的に捉えており、未来小説である『第四間氷期』執筆に刺激を与えただろうことは想像に難くない。また、エッセイ「人間未来史観序説」(『中央公論』一九五八・六)にはロスタンの「人類は大分前から進化の歩みを止めてしまっているのだ」を含む一節が直接「第三章 人間改造の可能性」から引用されている。さらにいえば、安部の「人間の胎児のうちに、その大脳皮質の細胞分裂数(人間の場合は三十三回)を一回増して、二倍にする」というエッセイ中のアイデアは、ロスタンのものである。

これだけ見てもロスタンが山本博士の思想的モデルになっていることがうかがわれるが、他にも『人間は改造されるか』の口絵写真には、「双頭の金魚」や人間や牛の「喩合双生児」や「カエルの発生」等が添えられていて、たとえば、山本研究所の見学での「頭が二つあるメダカとかヤモリの口がついたカエルだとか、そういったグロテスクな畸形をつくったことはありません」(24)という山本博士の言葉を想起させる。また、『人間は改造されるか』の「第三章」では、オルダス・ハックスリーのSFの古典『素晴らしき世界』(一九三三)の「広口瓶妊娠」によって産まれ、フラスコに満たされた人造血液で育てられる人間の胎児が生産される工場のイメージが語られている。

このフラスコたちは一時間で三三・三センチ、つまり一日に八メートルの割合で滑ってゆき、普通赤ん坊になるまでに要する時間、二百六十七日がたつと二、一三六メートル進んで傾瀉室に入り、そこでついに胎児は一人前の赤ん坊として飼育瓶の中から取りだされる。

山本研究所で「あそこが、人工の産道というわけですね」と頼木が興奮気味に言う場面があったが〔25〕、『素晴らしき世界』の「中央孵化、環境調節場」も『第四間氷期』の山本研究所も、生物学的な生殖が工場の製造過程と重なり、女性の身体が工場の字義通りの隠喩となって表現されている。前節で、生殖がバース・コントロールという科学的・文化的知見によって変容し、主体が女性から男性へと移っていることについて触れたが、ロスタンは、「人類は母親の役目などというものからは解放」され、「かつて神聖視されていた“母”という言葉は当を得ない、馬鹿げたものとな」る「未来図」について、性差の意味がなくなること強調している。他にもロスタンは、ヴィリエ・ド・リラダンのロボット小説『未来のイヴ』（一八八六）に触れ、「詩人の残酷な皮肉で、自然と人工、生命あるものと機械的なものとの間の関係の全部にわたる問題を提出している」ことや、「機械と人間の行動の相似に感動したサイバネティックス党の中には機械と有機体とが根本的に似ているのだと推断している者がある」ことを指摘している。クリストファー・ボルトンとは『第四間氷期』の戦略として「バイオテクノロジー、遺伝工学、サイバネティックス等の身体を操作する技術は、自然と人工や人間と機械との境を曖昧に」するポストモダン理論があることを論じたが、ロスタンの生物学や科学、さらに初期のSFにまで触れる幅の広い思考が安部を刺激したと考えられる²²⁾。

さて、ロスタンは他にも「人為淘汰」や「積極的優生学」を通して人間を改造し、超人をつくることの可能性を論じているのだが、自ら「このように超人をつくることは、果して望ましいことであろうか」と問題提起している。この問いは、勝見が山本博士に対して発した「この夢みtainな研究にも、ぞつとしないでむような理由があるとおつ

しやるのですか？」という問いに等しい。対する山本博士は強くうなずいて水棲哺乳類の畜産業の可能性を暗示したが〔24〕、後に、「人類は」「進化を、偶発的なものから、意識的なものに変える力を獲得した」ので「次は、人間自身が、野性から解放され、合理的に自己を改造すべき」だという積極的な自らの考えを披露している〔35〕。

ロスタンの答えは、まず人間を「進化の所産、広大な宇宙の中にもおそらく二つと同じ種族のない、再現不能でかけがえのない『独自の存在』」「名状しがたいものの奇蹟」としてその意義を確認したあと、だからこそ「人間は自分を凌駕し、よりすぐれたものを引き出すことを目指すべきだ」というものである。このような進化の頂点だからこそ自ら改良すべきであるというロスタンの考え方は山本博士の主張の原型であるといつてよい。「海底植民地の開発には」「それ自体に大きな意味がある。やむを得ないからではなく、それ自体が積極的に素晴らしい世界だからなんだ」という頼木の答えもまた、この延長線上にあるものと言えるだろう。

作者の安部はどう考えているのか。「人間未来史観序説」において安部は、「人間は、相対的によりよく改良される可能性はあっても、決して超人に進化することはない」と人間の進化を否定している。その理由は進化の鍵を握る「第二信号系（言語）」が「個体によりむしろ社会に属する」からであり、「人間の前進は」「社会の加工（革命）につとめる以外にない」と主張しているのだ。先に触れた座談会「科学から空想へ——人工衛星・人間・芸術」でも「自然よりも人間の方を変えるという思想、人間の方を適応させて変化させるといふ考え方」を「危険だと思ふ」と発言している²³⁾。

安部は「人間は改造されるか」という問いに対しては、それを否定する。むしろ、安易に「人間は改造される」とする思考を非難している。しかし、「人間は改造される」という仮説には、生殖における性差、人間（有機物）と機械（無機物）との峻別といった常識的な仮説を揺るがせる力があると考えて、あえてその仮説から出発したと考えられ

る。安部の仮説がグロテスクなのは、それが日常的な思考法に刺激を与えるためのものであるからであり、それは真実であるかどうかは視野には入っていないのである。(36)において、「たしか海とくらべると、陸は住みにくいかもしれない……でも、その住みにくさのおかげで、生物も人間まで進化してきたじゃないですか」という勝見に対して、山本博士が「偏見ですよ」といって、右に挙げた人間改造説を唱えるのであるが、本稿の一節で指摘したように、安部は「偏見」を成長させることで「対立物を自覚する」ことができると思っていた。山本博士からすれば「偏見」である勝見の考え方が、人間を改造しようとする考え方を「対立物」として明確にすることができるのである。反対に山本博士や頼木達の理念こそが、グロテスクな「偏見」であり、それを「育成する」ことが、安部の戦略であったと解釈すべきだろう。

五、仮説としての死／方法と主題

最後に「ブループリント」に示された「地上病」の少年の物語について考えてみたい。連載当時には短い挿話にすぎなかったが、単行本化された際、分量にして八倍ほど加筆され、読後の印象にも大きく影響するものとなっている。地上の「風」の「音楽」に無性に憧れていた水棲人の少年がいた。「風が音楽であるかないか」「自分でたしかめてみなければならぬ」と決心した「彼は、「スクーター」なしでは、十五分と泳いだことのなかった」にもかかわらず、一晚泳ぎ続け辿り着いた小島に這い上がった。すると、「世界のすべての重さという重さを、自分の体が一挙に吸い取ってしまったように、ずっしりと重く、そのまま地面にへばりついたきり、身動きも出来」ず、「一本の指を持上げるだけでも、やっとの有様」となる。しかし、陸に生きているときの重みを感じたとき、少年は、「風」を感じ、「内側からにじみだしてくる」「何か」「涙」を感じ、「満足し」、黙って死んでいく。

どうしてこのような予言を機械が語るのだろうか。それは、死に逝く勝見への餞と考えるべきであろう。用意された「一枚のプログラム・カード」である「ブルー・プリント」は、死を控えた男への最後の言葉なのである。そう考えたとき、このエピソードが「死」をテーマにしたものであることが重視されるべきであることがわかる。

この少年の孤独感は印象深く、座談会「科学から空想へ」で安部が言及しているシェクリーの「静かなる水のほとり」を思わせる²⁴⁾。宇宙の孤独な鉱山師である男が自分の録音した言葉しか発しないロボットと暮らし、やがて遠い星で古くなったロボットに看取られながら死んでいく物語である。安部は「とても孤独な、ぞつとするような小説です。欲望がなくならなければ人間は孤独に耐えきれない。しかし、欲望がなくなったら、もつと悲惨だ」と語っている。「欲望」とは未来への意志であろう。未来への意志を貫く場合、宇宙の偏狭で一人で死んでいくというグロテスクなほどに孤独な状況に耐えねばならない。水棲人間の少年もまた、風を感じるという欲望を持った以上、孤独な道を歩むしかない。

「あの、陸にはい上った水棲人の少年のように、私の指も、すでに鉛のように重い」というのが、ブループリントを見終えた勝見の最初の感想である。続いて、「人間はただ、存在するというだけで、もう義務を負わせられるべきものなのか？」と考えるのは、この「重み」の示唆するのが「存在する」ものの「義務」であるということであろう。少年も勝見も同じようにその「重み」を感じているのだが、「つくった者が、つくりだされた者に裁かれるというのが、現実の法則なのだろう……」という勝見の最後の言葉は、自分が予言機械によって葬られることを了解しているということである。一方、「死」と引き換えに「風」を感じた少年の場合、少年が憧れた陸の「風」こそが少年の命を奪ったのである。彼は、彼にとつての未来である陸の「風」に裁かれた、と言い換えてもよい。未来に裁かれるということは、未来に向かって精一杯生きて、未来が連れて来る「死」という「重み」を引き受けていくことなの

であろう。

ここには、安部が若い頃に親しんだマルティン・ハイデガーの『存在と時間』（一九二七）の影響があると思われる。ハイデガーは人間を未来に向かう存在として捉えて、人間存在の在り方を考察した。SFは思索的な側面をもっているものであるが、『第四間水期』は、ハイデガーの考え方を進めて、予言機械によって未来に「意志」を持たせるといふ仮説を立てて〔33〕、人間存在を追及したといえる。未来を設定することにより得られるのは、現在に対して境界線をひくことであろう。未来という境界線によって、現在が分断され、自分自身を理解するのである。未来の「自分の子供」のグロテスクな表象を見たとき、勝見は、妻との関係、夫としての責任という過去・現在を把握し、次に未来において自分が何を為すべきかを選択したのであった。そして、結末部においては、死という究極的な境界線が示されたと言える。

死という未来によって、終わりを示されたのは、果たして勝見だけだろうか。それは、勝見だけではなく、物語を読み終えようとする読者ではないだろうか。

途中で死を意識させられた勝見は、なんとか生き残ろうと躍起になる。その焦燥は読者に直接的に繋がって読者を不安にする。しかも、予言機械をはじめとして頼木たちは、「先生がこの結論をお知りになったことで、あるいは答えを変えてしまうような条件を、先生自身がつかまれるのではないか」という「期待」をかけて、「処置」までの様々な議論を進めていたのであった〔31〕。「答えを変えてしまうような条件」を見つけ出すことは、読者にも求められていたということである。もちろん、結果としてそんなものはみつからなかった。

「そうかしら？ ……事実だけで、機械が反応したりできるかしら？ ……やはり問題は、その事実を問いの形に変えてやる

「ことじゃないのかしら?」〔32〕

これは和田の言葉だが、頼木たちの勝見に対する働きかけは、「事実を問の形に変え」ることだったとも考えられる。そして、それは勝見を通して読者に対しても投げかけられた問いであった。「事実を問いの形に変え」とは、頼木の言葉でいえば「量的な現実を、もう一度質的な現実に綜合する」ということになるが、「問いの形」「質的な現実」とは、本稿で論じてきた戦略的で思想性をもつ構造体である「仮説」と等価なのではないだろうか。このような主題と方法との重なりには『第四間氷期』のリアリティがある。

安部のSFの方法について検討した本稿では、『第四間氷期』に用いられた方法的意識の下に設定された「仮説」の具体について、その戦略性、構造、思想性などの側面から考察を加えた。安部にとって、SFの方法とは、さまざまな時代や政治や制度などの「量的な現実」を綜合して「質的な現実」に還元し、「仮説」という「問いの形」にして読者に提示することであつた。

註(1) 奥野健男は、「解説 安部公房 ―その人と作品―」(『世界SF全集』第二七巻 早川書房、一九七一・五)において、「日本における最初の本格的長篇SFである」と評価している。

(2) 『第四間氷期』は『世界』に一九五八年七月から翌年の三月まで連載された。奥野健男は、「アメリカではエンターテイメントとして発達してきたSFというものが、わが国ではまだ耳なれないその当時」、「左翼系あるいは進歩的な評論が多かった『世界』に、「連載されたということは画期的な『事件』であった」と指摘している(『総解説 世界のSF文学』自由国民社、一九九一・一二)。

(3) 花田清輝「科学小説」(『近代の超克』未来社、一九五九・一二)。初出は、原題「SFの思想」(『宝石』一九五九・九)。引用は『花田清輝全集 第八巻』に拠る。

- (4) 安部が読んだのは、『世界大衆文学全集11 巨人の復讐（フランケンシュタイン）』（シェリー夫人作、山本政喜訳、一九四八・一一）であろう。
- (5) 座談会「科学から空想へ——人工衛星・人間・芸術」（『世界』一九五八・一月号）。出席者は、荒正人、埴谷雄高、安部公房、武田泰淳。
- (6) 日高昭二が「幽霊と珍獣のスペクタクル——安部公房の一九五〇年代」（『文学』二〇〇四・一一）において指摘しているように、安部が読んだテクストは、ロバート・シエクレイ『人間の手がまだ触れない 最新科学全集9』（松浦康有訳、元々社、一九五六・九）であろう。本稿ではその「解説」も引用している。
- (7) クリストファー・ボルトン「科学（サイエンス）とフィクション、そしてポストモダン——安部公房『第四間氷期』論——」（『昭和文学研究』第34集、一九九七・二）。
- (8) 対談・岡本太郎、安部公房「宇宙・人間・芸術」（『日本読書新聞』一九五八・一・一）。
- (9) なお、『宇宙恐怖物語』には、フィリップ・K・ディックの他にも、アイザック・アシモフ、ロバート・ハインライン、ロバート・シエクレイ、シオドア・スタージョンほかの秀作が収録されており、安部が当時のSFの名作・傑作に触れていたことがわかる。
- (10) 「外来者」の原題は「Impositor」で「詐欺師、詐称者」という意味である。
- (11) 優生保護法に関する政治的な動きについては、松原洋子「中絶規制緩和と優生政策強化——優生保護法再考——」（『思想』一九九八・四）、ティアナ・ノーグレン「中絶と避妊の政治学 戦後日本のリプロダクション政策」（岩本美砂子監訳、塚原久美・日比野利・猪瀬優理訳、青木書店、二〇〇八・八）、荻野美穂『家族計画』への道 近代日本の生殖をめぐる政治（岩波書店、二〇〇八・一〇）等を参照した。
- (12) これらの立法の中心となったのが谷口弥三郎という産婦人科医でもある参議院議員であった。ティアナ・ノーグレン（前掲）は、「独占的な中絶実行権」を得た指定医師（すべて産婦人科医）が日本母性保護医会という利益集団を形成、谷口がその会長を務めたことから、谷口について、「議員に選出され、同時に利益集団の幹部を務める政治家兼任ロビイスト」であると指摘している。もちろん、特定の利益団体のために法律の改正がなされたわけではないだろうが、人口問題、GHQの思惑など複雑な経済的・政治的・イデオロギー的な駆け引きがあったなかの優生保護法の改正であったといえるだ

ろう。

(13) たとえば、村松稔と荻野博は、「我が国に於ける最近の人工妊娠中絶並びに優生手術の総数の推計」(『国立公衆衛生院研究報告』一九五四・九)において、一九五三年の実数を「一八〇万〜二三〇万件と推定」している。

(14) 『朝日新聞』一九四九年五月十五日。

(15) 林麟はバヴロフ『条件反射学』(上・中・下、新潮文庫、全一九五五・八)を翻訳しており、他に『条件反射応用論』(評論社、一九五〇・二)、『条件反射』(岩波書店、一九五一・七)などの条件反射に関する著作もある。また、直木賞を受賞したこともある探偵小説作家・木々高太郎は林のペンネームである。

(16) 荻野美穂「家族計画」への道——敗戦日本の再建と受胎調節——(『思想』二〇〇一・六)。

(17) 『毎日新聞社人口問題調査会の産児調節に関する第3回世論調査』(『人口問題研究』第七三号、厚生省人口問題研究所、一九五八年九月)。

(18) 小谷真理『女性状無意識テクノガイネーシス——女性SF論序説——』(勁草書房、一九九四・一)。

(19) 荻野美穂『生殖の政治学 フェミニズムとバース・コントロール』(山川出版社、一九九四・一二)。

(20) 磯田光一「解説」(『第四間氷期』新潮文庫、一九七〇・一一)、鳥羽耕史「安部公房『第四間氷期』——水の中の革命——」(『国文学研究』一二三号、一九九七・一〇)。

(21) 一九五〇年代のジャン・ロスタンの他の翻訳には、『生命この驚くべきもの——人間の運命』(寺田和夫訳、白水社、一九五五・七)、『人の遺伝』(寺田和夫訳、白水社クセジュ文庫、一九五五年)等がある。なお、ジャン・ロスタンは、戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック』で知られる劇作家エドモン・ロスタンの息子である。

(22) クリストファー・ボルトン前掲論文。

(23) 中野和典は、「予言」権力——安部公房『第四間氷期』論——(『近代文学論集』三七号、二〇一一・一一)において、安部の発言を踏まえて人間加工の考え方を「進化論的には画期的な意味を認められない」と指摘している。

(24) 安部は作品のタイトルをあげていないが、内容から「静かなる水のとおり」であるのは間違いない。(6)で挙げた、シエクレイ「人間の手がまだ触れない 最新科学全集9」の最後を飾る短編である。安部は榎木恭介との対談「詩人には義務教育が必要である」(一九五八・一、『現代詩』)においても「いままで読んだうちで一番面白いし才能がある」と、シエク

リーを高く評価している。

※『第四間水期』および安部公房の発言・テキストは、初刊本に基づいた『安部公房全集』（新潮社）に拠るが、適宜、初出を参照した。

（そまたに ひでのり・関西学院大学非常勤講師）